

「キューバ革命の緑化」とマリノフスキーの子供たち ——持続可能エコロジー農業の実験から——

大杉 高司

I 文脈化という革命

あなたが突然に、原住民の部落に近い熱帯の浜辺に置き去りにされ、荷物のなかにただ一人立っているとご想像願いたい。

[マリノフスキー1980 [1922] : 70]

近代人類学の父、ブラニスワフ・マリノフスキーのこの言葉は、これから革命の狼煙をあげんとする者にふさわしい、若々しいロマンティシズムと自負心に満ち溢れている⁽¹⁾。『西太平洋の遠洋航海者』の序文で提示するこの自画像が、後の『マリノフスキー日記』[マリノフスキー1987 [1967]]の刊行とともに知られることになる彼の調査の実際とどれほどかけ離れていたにせよ⁽²⁾、事実多くの読者がこの呼びかけに応じて、ある者は畏怖と憧憬とともにこの新しい「学問」の学び手となり、またある者はこの孤高の人類学者像に自らの姿を重ね合わせようとしてきた。

マリノフスキーの革命は「文脈化革命」と呼ぶにふさわしい。彼は安楽な書齋にこもりがちな思索家たちに、ただやみくもに異国の地に向かうことを促していたわけではない。むしろ彼がこだわっていたのは、「原住民の部落」で自ら現地調査することで得られる知識の性質が、異国から送られてくる報告の取捨選択と再構成によって得られる知識とは明確に異なるという点だった。たとえば、前世代の代表格であり『金枝篇』[Frazer 1936 [1890]]や『旧約聖書のフォークロア』[Frazer 2003 [1919]]で知られるジェームズ・フレイザーは、イタリアのネーミの森の祭司殺しを世界各地の神話、呪術、王殺しの慣習と比較し、旧約のヤコブの結婚をアフリカからメラネシアにまでいたる交叉イトコ婚の慣行と照らし合わせて、野蛮から文明にいたる人類史の再構成を試みていた。ところがマリノフスキーにとってそれらは、どれほど著者の博覧強記に裏付けられたものであったとしても、一好事家の「文学作品」でしかなかった。それは、彼が構想する「科学」としての人類学の立場からは、呪術や婚姻規則その他もろもろの事象は、個別事象のそれぞれが置かれた「社会的文脈」に据えて把握されなければならないからだった。マリノフスキーはきわめて明示的に、自己をフレイザーらと差異化する。

原住民を人類の歪曲された子供っぽい戯画であるかのように描く説明を許容する時代はすでに去った。この絵はまちがっている。そして多くの誤謬がそうであったように、これも科学によって抹殺されたのである。民族誌的調査をするひとは、… [中略] …部族文化の全領域をそのあらゆる面にわたって調査しつくさなければならない。一つ一つの面に見られる一貫性や法、秩序は、それらを一つの統一的全体にまとめあげることに役立つ。

[マリノフスキー1980 [1922] : 79]

たとえば、呪術はそれが観察された社会の農耕や製造技術、希少財の交換や航海術などとの関係において捉えられなければならないし、婚姻はそれを取りまく親族・氏族組織や政治、相続や土地制度などとともに考察されなければならない。彼にとって、あらゆる事象の観察と分析の先に浮かび上がる個別社会の「統一的全体」性こそが学の真の対象だった。だから、その全体文脈への配慮や考察を欠いた前世代の試みは、認めがたい脱文脈化の産物とみなされるのである。

マリノフスキーは、人類学の目標は「原住民のものの考え方、および彼と生活との関係を把握し、彼の世界についての彼の見方を理解すること」[マリノフスキー1980 [1922]: 93]にあるという。しかし、それは地域研究として完結するのではない。マリノフスキーは、「原住民のものの考え方 the native's point of view」に寄り添う重要性を説きながら、そこに不意に「人間の研究」という大仰な言葉を忍びこませている。

これらの人々が何をよりどころに生きているかを感じとり、彼らの幸福の実質がなんであるかを理解したいという気持ちをもたずに、彼らの制度、習慣、法律を研究したり、行動や心理を調べることは、私にいわせれば、人間の研究から期待しうる最大の報酬を失うことである。(傍点は筆者)

[マリノフスキー 1980 [1922]: 93]

何気なく読み飛ばしてしまいがちなこの「人間の研究」の語も、マリノフスキーが構想した人類学とその後の展開を考えると、無視できない重みをもっている。この個別と普遍のあいだの一見して無媒介な接続をどのように捉えるべきかについては、本稿では扱いきれない問いである。ただし、「キューバ革命の緑化」の試みを覗き見たのちに、この同じ問いをまた違った景色のもとで浮かびあげようと思う。ここではひとまず、マリノフスキーがこの個別から普遍への飛躍を前世代の人類学者たちと共有していたこと、にもかかわらず、前世代とは違う手順で想像していたことを確認しておきたい。フレイザーらの進化人類学においては、ネーミの森の司祭殺しやヤコブの結婚は、読者になじみ深くそれゆえ説明の必要のない不変の参照点であった。課題は、司祭殺しやイトコ婚の類似物を世界各地から探し出し、それらを人類進化という単一の過程に位置づけることで、多様性のなかに人類の基本的同一性を認めることにあった。対してマリノフスキーはまったく異なる経路で「人間の研究」を想像する。彼が個別社会の贈与、性、呪術を語るとき、それは経済、性、信仰をめぐる私たち自身の見方を再帰的に浮かびあげ、その地方性や偏狭性を確認するために語られていた。彼にとって諸概念は不可避免的に文化的拘束をうけており、分析枠組みそれ自体もまた私たち自身の諸前提に埋め込まれている。だから「人間の研究」への道のりは、それがどのような道りであるにせよ、分析者自身のものの見方の偏りを認めることから始まる。近代人類学のあらゆる試み、ポスト近代をへた現代人類学の試みも含めて、程度の差こそあれこの点で私たち皆がマリノフスキーの子供たち⁽³⁾であるといえる。ここで詳しく触れることはできないが、人類学は隣接諸科学が中立的概念とみなすさまざまな概念、たとえば人格 [Leenhart 1979 [1947]; Schneider 1968]、経済 [ポランニー1980a, 1980b; Gregory 1982; Graeber 2001]、政治権力 [バランディエ1982; ギアツ1990]、ジェンダー [ミード1976; Strathern 1990]、芸術 [Price 1989; Gell 1998]、科学技術 [タンバイア1996 [1990]; ラトゥール1999]、時間 [Gell 1992; Munn 1992]、宗教 [アサド2004 [1993]; Mahmood 2011]、自然 [Descola

and Palsson 1996 ; Kohn 2013] といった概念が、いかに私たち自身の文脈の拘束をうけているかを、繰り返し明らかにしようと試みてきた。この脱親和化がどのような道のりをへて「人間の研究」へ向かうのかを正面から語ろうとする者は極めて稀である[ただし、浜本1985 ; 1996]。しかし、おそらく多くの人類学者は、ちょうどヴァルター・ベンヤミンが翻訳の過程の果てにどの個別言語にも属さない純粹言語の到来を夢想したように[ベンヤミン 1996]、民族誌執筆という翻訳作業のなかで自らの分析概念を絶えず修正・変換・拡張させながら、その積み重ねのうちにどの文化の拘束もうけない「人間の研究」の達成を予感してきたようにみえる⁽⁴⁾。いずれにせよ、前世代の進化人類学が普遍なる一を先取りして議論を進めたのに対し、マリノフスキー以降の人類学は複数性から出発し、不断の自己異化の遙か彼方に「人間の研究」を透かし見ようとしてきた。人類学による隣接諸科学への挑戦が革命の名に値し、またそうであり続けているとすれば、この自己異化の試み（の明らかな無謀さ）にこそ、その源を探りだすことができるだろう。

ところが、すでに多くの人類学史研究が明らかにしてきたように、この自己異化を可能にするはずの現地調査は、決してマリノフスキーの発明ではなかった[たとえば Langham 1981 ; Stocking 1983]。彼の師であったリバース、ハッドン、セリグマンはすでに現地調査法を講義していたし、理論の面でも進化人類学からの決別を準備していた。だからマリリン・ストラザーンは、マリノフスキーが人類学史において引き起こした重大な変化が、現地調査法や機能主義理論であるよりはむしろ、彼がいかに民族誌を組織化し、それによって読者、筆者、調査対象者との関係を変化させたかにあると、分析する[Strathern 1987 : 258-261]。前世代のフレイザーは狭い学問サークルを越えてひろく教養人に読まれる作家だった。フレイザーは司祭殺しやヤコブの結婚を読者と共有し、その共有された文脈の内側で、めくるめく世界旅行へと読者を誘った。フレイザーを通じて読者は、「私たち」にとってなじみ深いものが遙か彼方の異国の風習と同根的存在であることを知ることになったのである[Strathern 1987 : 262]。対照的にマリノフスキーは、あからさまに読者である「私たち」と、民族誌記述の対象たる「彼ら」の距離を設定する。冒頭にあげた彼の呼びかけにも明らかなように、「私たち」と「彼ら」の橋渡しをする筆者＝人類学者もまた、一般の読者とは隔絶された英雄のごとき存在として提示された。そして、個別社会特有の文脈の提示、「私たち」にとっては奇妙な風習が「彼ら」にとっては普通でありふれたものであるといった叙述、さらに諸事象が緊密に相互連関して首尾一貫した有機的全体性を構成していることの強調、これらがマリノフスキーのきわめて生産的で「説得力ある物語 persuasive fiction」を組織立てている[Strathern 1987 : 258-261]。ストラザーンは、マリノフスキーが「土着の観念を『彼ら』の社会的文脈に据えることによって、人類学者による分析的観念の組織化それ自体を文脈化」[Strathern 1987 : 259] したのだという。彼は、ただ単に異国の「彼ら」の文脈に注目したのではなかった。「彼ら」の文脈を通じて、近代人類学の営みの新しい文脈を作り上げるといふ二重の文脈化で、人類学に革命を起こしたのだった。

1987年に書かれたストラザーンの論考は、ポスト近代理論を援用する当時の人類学の潮流が、マリノフスキーによって悪魔化されたフレイザーをどう再評価できるのかを論じることを主題にしていた。しかし、ここではむしろ、1920年代の革命の反復性や回帰性を強調しておきたい。今日でも、人類学者による同僚人類学者への批判は、二つの文脈化が適切になされているか否かをめぐることが多い。よく耳にする（そして筆者に対してたびたび向けられる）「それは人類学ではない」との趣旨の批判は、「彼ら」の文脈を十分に考慮に入れたうえで、他の人文社会科学と

区別される人類学の文脈に当該研究を適切に据えているか否かを問題化している。理論史的にも、文脈化革命は繰り返したちあらわれてきた。たとえば、マリノフスキーの流れをくむ機能主義的な神話理解は、特定の神話が隣接地域の神話群とどのような相互変換関係に置かれているかを主題化したレヴィ＝ストロースの構造主義によって批判にさらされた〔レヴィ＝ストロース 1970, 1972〕。構造主義は、「彼ら」の範囲を、神話や親族構造の変換関係を基準に浮かびあがる領域にまで拡大したのだといえる。この構造主義はさらに、住民の「肩越し」にテキストとしての文化の意味さぐるクリフォード・ギアツの解釈人類学によって批判される。解釈人類学は、神話や親族構造の論理をさぐる構造主義が「科学主義」や「普遍的合理主義」を内蔵していることを暴き、個別社会の文脈で流通する想像力との不完全ではあるが説得性をもちうる対話過程へと人類学者を引き戻した〔Geertz 1984；ギアツ（ギアーツ）1987：276, 285, 444-445〕。さらにエドワード・サイードの『オリエンタリズム』などに触発された1980年代の人類学の自己批判、カルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアル・スタディーズと合流した80年代後半から90年代の（ポスト）植民地主義の人類学は、人類学知を植民地支配という歴史的な文脈に据えなおすべきことを主張する〔Asad (ed.) 1973；Stocking (ed.) 1991；Taussig 1987；Thomas 1991；クリフォード2003；クリフォード、マーカス（編）1996；栗本、井野瀬（編）1999；杉島（編）2001；太田1998；山下、山本（編）1997；山路、田中（編）2002；ルクレール1976〕。機能主義や解釈人類学で「彼らの文脈」として静態的に捉えられてきた文脈が、実は人類学がその一部であった植民地支配の文脈のなかで発生したものであることが暴きたてられるのである。そして最後に、2000年代から2010年代に、科学社会学／人類学のアクター・ネットワーク理論（以後 ANT と略記）にいわば「遅れて」触発されることになった人類学は、諸科学の分業体制、とくに自然科学と人文社会科学の分断のなかで限定的にとらえられてきた諸事象を、より広いネットワーク（ないし、「社会的なるもの the social」）の文脈⁵⁾に位置づけなおすことを試みるのである〔Gell 1998；Henare, Holbraad and Wastell (eds.) 2006；Kohn 2013；Latour 2005；Riles 1999；Mauer 2005；春日（編）2011；ラトゥール1999〔1987〕, 2008〔1993〕〕。

革命という名こそ与えられなかったものの、いずれの転換点においても、主唱者とその信奉者たちは新たな旅立ちを希望とともに語り、かつての人類学を古いものとして名指し、守旧派の文脈とは明確に区別される新たな文脈の発見者として自らを提示してきた。そのつどこの新たな文脈は、「彼ら」や「それら」の「ほんとう」の文脈であり、学問としての人類学が依拠した維持すべき「より正しい」文脈として提出される。かくも人類学は、他の学問の住人には信じがたいほどの「革命好き」である。本稿では、この反復の最後の場面すなわち ANT に触発された人類学が探求する文脈と、いまもキューバ革命を生きる「彼ら」の脱／文脈化とを照らし合わせ、おのおのの文脈作成がいかなる特徴を有しているかを明らかにすることを試みたい。

II 捻じれた双子：再帰人類学と ANT

本節では、ANT がネットワークとよぶ文脈の性質について筆者の見解を示し、次節以降でキューバ革命の一側面を叙述し分析する際の下地作りをしておきたい。しかしその前に、1980年代から90年代の人類学がいかなる文脈を対象化しどんな文脈に自らを位置付けていたのかに、簡単に触れておこう。というのも、当時の人類学の鍵概念のひとつが「再帰性 reflexivity」であり、

その主要な援用元のひとつピエール・ブルデューの再帰社会学 [Bourdieu 1992] を、ANT の主唱者ブルーノ・ラトゥールが自らの対象文脈や学問的文脈を形作る際に、否定的参照点としていわば悪魔化しているからである。

1980年後半に人類学研究をはじめた筆者にとって、当時の（ポスト）植民地主義研究の革新性ほど魅力的に映るものはなかった。すでに触れたように、（ポスト）植民地主義研究は、それまでの人類学者が「彼ら」のものと見なしてきた文脈が（ポスト）植民地支配の歴史的な文脈に拘束されていたこと、そして他ならぬ人類学が分割統治という統治技術に組み込まれ、この「彼ら」の境界を形作ることに深く関与してきたことを明らかにしようとしていた [ルクレール1976；Asad (ed.) 1973；Stocking (ed.) 1983, 1991；クリフォード、マーカス（編）1996 [1986]；Thomas 1991]。（ポスト）植民地主義の人類学は、したがって、人類学者が調査し民族誌を書く全過程において、自身が「実際には何をしているのか」を再帰的に振り返ることを強く促した [クリフォード、マーカス（編）1996 [1986]；マーカス、フィッシャー 1989 [1986]；Rabinow, Marcus, Faubion and Rees 2008]。しかも、脱植民地化をへた現代においても、少なくともひとつの「社会」や「文化」を見渡すことができるというマリノフスキー以来の想定、すなわちその超越的視点の想定が継承されたままだった。人類学者の知識生産が、狭い意味での政治的支配をこえた認識論的暴力をふるってきたことを批判的に捉えなおし、「彼ら」が「主体的」に語ることや行うことに、その暴力に抗う姿を読み取ることが課題となっていた [太田1998；ロサルド 1998 [1993]；山下、山本（編）1997]。再帰性 reflexivity/recursivity 概念には学問分野を跨いだ多様性が認められるものの [Ashmore 1989；Woolgar 1988]、当時の人類学において再帰性とは、この（ネオ）植民地主義の文脈への「反省」と同義であったといつてよい。1980年代と90年代に専門的トレーニングを受けた若い人類学者で、この新しい潮流に僅かばかりでも影響を受けなかったものはいなかった。なかでも「革命好き」な筆者は、植民地主義の過程がもっとも初期にはじまり、もっとも最近まで続くカリブ海地域を、実地調査の場所として迷わず選び取ることになるのである。

しかし、トリニダード・トバゴ国にて調査を開始してしばらくすると、この人類学の再帰的自己反省が、当地の住人たちによる語りや実践とほとんどまったく接点を見出すことのできないことに当惑を覚えるようになる。クレオール性をめぐる彼らのエスニック政治はその政治的文脈のなかでこそ意味と機能をもち、複合宗教の諸実践は認識論的支配への抵抗としてよりも他ならぬその宗教実践の論理のなかで展開していることは明らかであるようにみえた [大杉1999, 2001]。当地での3年間に、筆者がすこしずつ手にした当たり前の認識は、再帰的反省を促す文脈が「彼ら」の文脈であるよりはむしろ「私たち」自身の学問的文脈であることだった。ところが、世界各地で調査を実施してきた同僚たちは、しきりに現地住人たちの「主体性 agency」や「戦略」、「抵抗」を語り続けていた [たとえば太田 1998；山下、山本（編）1997]。帰国後の再適応過程のなかでようやくはっきりしてきたのは、植民地主義的な超越を批判する再帰人類学が、世界の多様性を単一の語り口に還元しながら、実はより一層の超越性へむけて再帰性の梯子を上りつづけることを促していることだった [大杉2001]。ポスト・コロニアル研究の批判者レイ・チョウが『『サバルタン』の神聖化』と呼び、ラッセル・ジャコビーが「ワン・ナッピズム One Upism」と表現する私たちのゲームは、メトロポリスの大学キャンパスの文脈にこそ位置付けられる [チョウ 1998；Jacoby 1995；大杉2001：271-280]。ジャコビーの論考が「周縁者の回帰」と題されてい

ることも示唆的である。一枚岩的な異文化表象で周縁化されるサバルタンたちをも視野に収める文脈設定をすることが、メトロポリスの学問的文脈での地位を高めることに直結している [チョウ1998: 11-48]。ここでも異なる二つの文脈は、マリノフスキーの場合と同様、同時並行でつくりあげられていた。ところが、いかにサバルタンへの共感を売りものにしたところで、しばしば研究者の再帰性は少なくとも一段階はサバルタン自身の自己省察より上をいっているとされ、なによりメトロポリスでは誰が「よりメタな」視点をもって他のライバルに自己批判を迫れるかが勝負の決め手だった [Parry 1994; 比較参照として Chakrabarty 1998; 大杉2001]。このゲームによって手に入る俯瞰的な視線が、植民地主義を可能にした俯瞰とどれほど似かよったものであるかについて、(ポスト) 植民地主義の人類学は今となっては驚くほどに鈍感だったのである。

「すべてを水平面上に保て Keep everything flat」[Latour 2005: 190]。これが科学社会学者ブルーノ・ラトゥールが、ANT の道具だてで調査を始めようとする若い研究者へむけてする呼びかけである。このラトゥールの格言は、ブルデューの再帰性に触発された再帰人類学とは正反対のメッセージを発しているように読める。彼は自身が準備し組織する革命⁽⁶⁾の賛同者たちに、垂直方向へ上る代わりに、水平面にひろがるネットワークをより遠くまで追跡すること、そしてそこに含まれるアクター＝媒介者をできるだけ多く発見することを要求している。ラトゥールはこの対比を、ブルデューに代表されるマルクス主義社会学の再帰性をメタ再帰性と呼びながら、意識的に際立たせてもいた [Latour 1988]。彼のメタ再帰性に対する批判の要点は、それが、事実作成 fact making 作業の現場でいかなる触知可能な基盤をもたない諸概念（たとえば階級、資本主義、グローバル化、(ネオ) 植民地主義）を、あらゆる現象の説明項として無造作かつ正当化できない仕方で持ち込む点にある。ラトゥールにとって、たとえばグローバル化が問うに値する問題だとすれば、その「グローバル化」なるものが「どの部屋で、どんな俯瞰図のもと、どんな舞台監督によって」生起させられているのかの具体の詳細が問われなければならない [Latour 2005: 190]。ただ単に客観的であることを装う抽象概念は、彼の客観主義的プログラムに「事実」としての場所をもたないのである。

それでは、ANT の登場とともに、ようやく私たちは(メタ) 再帰性の亡霊を追い払うことになったのだろうか。この問いに首肯するのは難しい。というのは、再帰社会学／人類学と ANT とのあいだに、見逃しがたい類似が認められるからである。たとえば、「ネットワークを追跡せよ」との呼びかけに応じた、ある(架空の) 入門者に対して、ラトゥールがするアドバイスをとりあげてみよう。その入門者は、ネットワークの追跡をはじめたものの、いったいどこで追跡をやめ、いつ論文を書き始めたらよいか分からずに途方に暮れていた。そんな彼にラトゥールは平然として「よい論文とは、書き終えた論文のことだ A good thesis is a thesis that is done」といつのける [Latour 2005: 148]。なんとも残酷な、しかしそれなりに実践的效果のある、少なくとも間違いなく正直なアドバイスだろう。ある特定の科学的事実、あるいは事実らしきもの factish が、いかなるアクターたちによるネットワークに支えられているのかを、新参者はもちろんのことラトゥールでさえ予め知ることなどできないからである。仮に追跡をやめる普遍的に適用可能なガイドラインがあるのだとしたら、ANT の研究プログラムの全体が意義を失ってしまうに違いない。だから彼は、あなたが論文を書き上げられると感じたときに追跡をやめればよい、というのである。それまでは、あなたは「近代主義」の学者たちが引いてきた如何なる恣意的な境界（たとえば自然と社会、事物と人、科学と政治など）をも越えていかなければならない [ラトゥール

1999 [1987], 2008 [1993]]。しかし、いったい人は「よし、書きあげられるぞ」などといった魔術的感覚を、いかにして手にいれるのだろうか。「あらゆる面にわたって調査」することを追従者たちに課した、かのマリノフスキーにも向けられてしかるべき問いである [マリノフスキー 1980 (1922) : 79]。この問いに解答があるとすれば、当惑する者のやる気を萎えさせること間違いない、次のようなものだろう。それは、すべての「重要な」アクターたちを含み込む十分に「広い」視野を手にいれたと自ら確信する、そのあなたの確信能力次第なのだ、と。その十分に「広い」視野だけが、ある特定の事象が既成事実になっていく全体様相を捉えることができる。ここに至りて因果連鎖は致命的なまでに循環する。何かを事実(らしきもの)にしているのは広大なネットワーク＝文脈だが、そのネットワーク＝文脈がどこまで広がっているかは何かの事実化という基準によってのみ確かめられる。あなたはだから、ただただ自身の視野をより広くし続けなければならない。たしかに ANT は垂直的上昇を禁じ、水平的な追跡を説いていた。しかし、「すべてを水平面上に保つ」のは容易いことではない。そもそも追跡をやめるときあなたはどこに位置し、どんな場所から書いているのだろうか。ANT に触発された人類学者たちは、自分たちが研究対象であるネットワークを構成するもうひとりのアクターに過ぎないことを、しばしば仄めかしている [Mauer 2005 ; Riles 2001]。しかし、彼ら以外のどんなアクターが、それほどまでに広大な視野＝文脈を手をしているだろうか。

ANT の最重要概念のひとつブラックボックスは、筆者の上記議論のよい試金石になるだろう。ブラックボックスは、特定できるサイズをもち、比較的小さなサイズに収まるからこそ科学者の実験室や他の専門職能者たちの事実作成の現場のそこかしこに見いだされる。ブラックボックスの内部には、かつてはうまく捉えることも作成することもできなかった複雑なメカニズムが、そしてそのメカニズムが「事実」へと成長していく歴史過程が畳みこまれている。しかし、それは今この新たな事実作成の現場では入力に出力で応じる箱にすぎず、その既成事実としての自明性がゆえ、またしばしば比較的小さく携帯可能な装置 (コンピュータ [ラトゥール 1999 [1987]]、真空ポンプ [ラトゥール 2008 [1993]]、グローバル化指標 [Latour 2005] など) として具体化されているがために、その装置に特別の疑いが向けられる場合以外には、作業にかかわる者たちがことさらに視線を注ぐとはしない。ところが、作業者たちとは対照的に科学社会学者たちは、このブラックボックスにこそ注意を向けなければならない。それは「パンドラのブラックボックスを開く」[ラトゥール 1999 [1987] : 1-30 ; ラトゥール 2007 [1999]] ことで、ある特定の事象が既成事実になる以前の作成段階の姿を追うことができるからであり、この作成の過程を追跡することこそが ANT という研究プログラムの目的だからだった。しかしそれにしても、この「ブラックボックスを開けよ」との要請には、再帰社会学／人類学を突き動かした啓蒙主義と極めてよく似た衝動が織り込まれているとはいえないだろうか。ANT のプロジェクトにとってブラックボックスの内に眠る歴史が重要なのは、それが「何かが事実なのは、単にそれが事実だからだ」という思いこみや幻想の偽りを暴いてくれるからだった。ブラックボックスを開けその内に強い光をあてることは、日常に埋もれてあるドクサや、人々を拘束してやまないイリュージョンを日の光のもとに晒そうとしたブルデュー流の作法とたいへんよく似ている [ブルデュー 2009 [1997]]。くわえて見逃せないのは、ブラックボックスを開けた先にあるのはまた新たなネットワークであり、またそのネットワークはいくつものブラックボックスに支えられ、さらにそのブラックボックスには…と、入れ子状に反復されていくはずであることである。少なくとも理想的には、科学

社会学者は神的とさえ呼べるような、全てを見渡す視野を要求されるのである。

再帰人類学と ANT はある特有の捻じれを共有し、そして共にその捻じれを表舞台から消去しようとする。(ネオ)植民地主義的超越への批判がさらなる超越への運動に私たちを絡めとっていったように、(メタ)再帰性を批判することで自らの輪郭を形作った研究プログラムは、また独自の(メタ)再帰性をもっているかのようなのだ。双方とも、一方でこれまで顧みられなかった諸存在の詳細に光をあてるよう追従者たちに呼びかけ、他方で誰よりも広大な視野と文脈を手に入れたことを内心の誇りとし、隠されてきた「ほんとうの」事実を宣言してみせる。比較的若い世代の人類学者が ANT に惹きつけられ、かつて(ポスト)植民地主義の人類学がそうだったように、父殺し的な暴露に耽ける傾向があるのも驚くに値しない。いったいどうしたら、私たちはこの亡霊から逃れることができるだろうか。いや、亡霊を祓うよりも、むしろ文脈をめぐる諸理論、再帰性 reflexivity や回帰性 recursivity をめぐる代替理論の数々に期待し、それらを順に召喚していくべきだろうか[たとえば、Dilley 1999 ; Scharfstein 1989 ; Ashmore 1989 ; Woolgar 1988]。その可能性のほんの一端はⅣ節で示すことにはなるものの、ここではそれら諸理論を包括的にレビューすることはしない。むしろ本稿では、人類学的調査の現場で、作成中の文脈、作動中の再帰性を確認することからはじめたい。というのも、マリノフスキーの子供たちのひとりを自認する筆者にとって、「人類学する」とはやはり現地から思考することだからである。そこでⅢ節以下では、日本や他の先進国で注目される所謂「キューバ革命の緑化 The Greening of the Cuban Revolution」(「緑の革命 Green Revolution」ではないことに留意されたい)、より限定的には持続可能エコロジー農業をめぐる近年の試みについて論じることにした⁽⁷⁾。そこに浮かびあがるのは、キューバ愛好家たちが目にしたいと願うのとはまったく違う姿である⁽⁸⁾。しかも、ここで召喚するキューバの亡霊が、私たちにとり憑く亡霊よりもっと執拗にわたしたちを苦しめない保証はどこにもない。しかしすくなくとも、私たちの文脈設定や再帰性を振り返るための、格好の物差しを提供してくれることは間違いないだろう[Strathern 2004 ; Holbraad and Pedersen 2009]。

結論をやや先取りするならば、以下みる事例の興味深い点は、キューバの専門家たちがきわめて意識的にネットワークを消去し、そのことによっていわば公然とブラックボックスを作り上げていることである。ブラックボックスは、プロジェクトを続けるための文脈の画定をし、同時にそのプロジェクトで彼らに関わろうとする当の対象、すなわち持続可能性やエコロジーそれ自体を作り上げもする。だから彼らは、頑なにまでにブラックボックスを**閉じたまま**にしようとする。一見すると、このブラックボックスをブラックなままにしておく試みは、彼らに再帰性が欠如していること、言い換えるなら、彼らが「文脈に埋め込まれた」前近代社会の住人であることの証しであるように映る[ギデンズ1993：31-35]。しかしⅣ節で論じるように、彼らの活動は重要な点で二次サイバネティクスが描き出す科学者たちのブラックボックスの取り扱いと比較可能であり、この観点からこうした印象が見当はずれであることが了解されるだろう[Ashby 1956：86-117]。最後のⅤ節では、ブラックボックス化が、「ポスト・ユートピア」の時代に生る彼らにとってもつ意義に触れ、それが私たち人類学者の営みにどのような光を照らし返してくれるのかについても論じたい⁽⁹⁾。

Ⅲ 「開発の人類学」の窮状：「中景」のブラックボックス化

開発現象を批判的に分析する研究は人類学の分野でもことかかない[Cooke and Kothari (eds.) 2001, Ferguson 1990; Mosse 2004など]。しかし、この5年ほどのあいだ筆者がキューバで直面してきた困難を文脈化してしめすには、とりわけデイヴィット・モセの業績に言及するのが最適だろう。インド西部地域での開発プロジェクトに長年かかわってきたもつモセは、その経験に基づき開発ポリシーと実際の活動のあいだに深い溝があることを指摘している。彼は、開発ポリシーが開発実践を導いているというよりむしろ隠しており、開発にかかわる主要アクターたちが、ことの成行きのかんにかかわらず首尾一貫した開発表象をすることに、エネルギーの多くを費やしているとさえいう。その上で彼は、ANTの格言に忠実に従いながら、自身の学問的試みを開発ポリシーと開発実践の「あいだに横たわる大きなブラックボックスを抉じ開ける」ことと特徴づけている[Mosse 2004: 3]。筆者がキューバで直面したのも、モセが直面したのと同じこのブラックボックスだった。

2011年に、筆者がある国際NGOの代表と初めて顔をあわせたとき、彼女は「コイノベーション *Co-innovación*」と題された3億円規模の農業プロジェクトを始めようとしていた。各国大使館に資金提供を要請する際に提出するプロジェクト企画書は、筆者が言葉を失うほど詳細を極めるものであり、彼女自ら「博士論文に匹敵」する「これまでの仕事の集大成」と位置付けていた。農学や生物学の国際会議に足しげく通ってえた科学知識、キューバ政府関係者とのつきあいで身につけた政治的バランス感覚、NGO関係者のあいだで流通する鍵概念をふんだんに盛り込んだその文書は、まさにプロフェッショナルの仕事と呼ぶにふさわしいものだった。当該プロジェクトは、ハーバード・ビジネススクール教授マイケル・ポーターが『競争優位の戦略』で提出した「価値連鎖」論を社会主義状況に適用し、マタンサス州とビジャ・クララ州のいくつかの地域で試験的なネットワークを作り上げることを目指していた。「価値の連鎖」のネットワークは、中央省庁出先機関、地方政府、研究機関、内外NGO、農業技術者、指導員、各種農協、農民、教師、各種食品加工工場、その他無数の人工物や農作物を互いにフィードバック・サイクルで結び、損失を最小限にしながら効率的に価値創造することで持続可能社会を試験的に実現しようとする。何より筆者の関心を惹いたのは、文書に現れる複数の図像がまさにANTの具体化であるように映ったことだった。ANTの道具立てを用いて、それ自体ANT的な現象を分析する。そんな回帰的な試みに筆者は心を奪われていた[比較参照として Riles 2001]。4時間近いインタビューのあいだ筆者の疑問に彼女は逐一詳しい説明で応じ、彼女もまた筆者がこれまで実施してきた調査に関心をもち、長い間キューバとかかわってきた外国人として苦労話を分かち合うなどして、あるいは互いの仕事に対する敬意すら生まれ始めていたように思う。なにより筆者にとっては、これからの調査のよき導き手との、比較的初期の段階での幸運な出会いだった。筆者が共同研究をもちかけると、彼女は快く承諾してくれることになったのである。

しかし、彼女とのコンタクトはすぐに失われることになった。1997年来、別のテーマでキューバでの実地調査を続けてきた筆者は、このような経験をしたことがなかった。筆者のどんな発言や行動が、彼女に不信を抱かせたのだろうか。いやそれとも、幾度もの電話、度重なる約束の反故には、彼女の個人的な資質を疑うべきだろうか。暗中模索でキューバの農業開発業界を歩き回るうち、やがて筆者はこうした憶測がきわめてナイーブであること、彼女の対応がこの業界での

いわば通常の「もののやり方」であることに気づくことになる。キューバ国内 NGO（しばしば、政府組織型非政府組織の頭文字をとって GONGO と呼ばれる）と政府系研究機関がそれぞれ開催した、持続可能エコロジー農業をめぐる二つの国際シンポジウムでは、組織者たちは外国からの参加者をキューバ全土にひろがる実験的農場へのガイドつきツアーへ熱心に誘い出していた。これら実験農場の多くは、非政府系の農業協同組合（CPA, CCS, UBPC）の農場であり、2000 年前後からそれら協同組合が国際 NGO の絡む大規模プロジェクトの舞台となってきた⁽¹⁰⁾。農業協同組合の代表者たちは、そうした機会に外国人参加者たちに過剰とも感じられるほど開放的である。しかし、ひとたびこちらが調査の実施を具体化しはじめると、突然にして連絡を途絶えさせるのが常だった。国際 NGO を通じて資金提供者となる各国大使館員でさえ、受益者の農業協同組合を日帰り訪問するためには数カ月まえから複数の省庁への訪問申請をし、許可が下りるのかどうか分からないまま、音沙汰なしの期間を過ごさなければならないという。数週間あるいは数カ月間滞在して実地調査をするなど、問題外だった。

筆者は戦略をかね、国際 NGO と農業協同組合のあいだを繋ぐキューバ人研究者、農業技術者、エコロジスト、開発援助専門家、社会学者たちの随伴者となり、彼らがその活動のなかでどのように国際 NGO と農業協同組合員を橋渡ししているのか、どのように両者の利害、関心、論理の違いを翻訳しているのかに研究関心をむけるよう努めた。しかし、そこでも政府機関の許可の壁が立ちはだかる。個人的に信頼関係を築き、研究交流や研究協力費の提供など利害関係を共有するキューバ人研究者たちに、インフォーマルなかたちで幾人かの農業協同組合員に引き合わせてもらうことはもちろんできたが、そうした機会は散発的で、数時間限りの農場見学や会話の域でなかった。異なる利害、関心、論理の折衝と翻訳の現場に立ち入るには各省庁の許可が必要で、しかも政府が想定している許可は国際シンポジウムでのガイド付きツアーと同種の現地訪問だったのである。その範囲をこえた活動への立ち入りで、筆者を手助けしてくれるキューバ人研究者たちの立場を危険に晒すことに躊躇いも覚えた。やがて筆者は、官僚機構のハイラーキを少しずつ上る別の戦略も試しはじめる。本研究テーマの調査をはじめから 5 度目のキューバ訪問で、ついに筆者は近年最大規模の持続可能性農業プロジェクトの全国レベルの統括責任者と知り合うことになった。何日にも渡った意見交換ののち、彼は知りたいことは何でも調べてよいという。国家レベル、地域レベル、村落レベルの会議にも参加可能だと。それは、彼にいわせれば「**完全な透明性**」を達成することが本プロジェクトの最大の目標だから」だという⁽¹¹⁾。ところが数日後、ようやく固い扉を抉じ開けた達成感とともに翌日の帰国の準備をしていた筆者に、とつぜん悪いニュースがとどく。また別の友人で、キューバにおけるエコロジー農業の推進で最大の影響力をもつその人物は、電話の先でいつもの陽気な声をひそめ、申し訳なさそうに、しかし交渉の余地がないことがそれと分かる語気で、資金提供元の欧州委員会が筆者の関与を嫌っていると伝えてきた。欧州委員会にまでほんとうに話が行ったのかどうかは定かではない。いずれにせよ確かなのは、筆者には決して抉じ開けることのできない空間が、そこに横たわっていることだった。

こうした現地調査に伴う苦労話や失敗談のたぐいは、通常は人類学の表舞台にはでてこない。苦労するのは当たり前であるし、たいていなんとか失敗を乗り越えたうえでせいぜい酒飲み話の肴として懷古的に語られるのが常である。しかし、ここであえて長々と紹介したのは、筆者が経験したこの**閉鎖**それ自体をここで主題化したいからだった。この閉鎖ないしブラックボックス化は、キューバにおける持続可能エコロジー農業プロジェクト**表象**のいずれにおいても明確に反映

されている。ここで表象は、表象から独立して予め存在している何かを代理して指示するのではない。持続可能エコロジー農業をはじめようとするものは誰であれ、農業協同組合に属さない都市型小規模農業従事者たち *parceleros* でさえ、国際 NGO 職員やそのカウンターパートにあたるキューバ人専門職（研究者、農業技術者、政府職員など）に対し、自分が受益者となりうるプロジェクトについて説得力のあるプレゼンをしなければならない。彼らには、鍬や種子から貯水槽からミミズ養殖場制作に必要とされるコンクリートまで、農耕に必要とされるあらゆるものの購入資金がなく、またあったとしても購入機会があたえられていない。プロジェクトがなければ何もすることができないのが実情である。多くが経済学や法学、コミュニケーション学や英語学など農業とはまったく関係ない学問を大学や短大で学び、それぞれの専門分野の公務員として働いてきた彼らは、農業従事者として成功することがより真つ当な生活をおくる道を切り開くものと考え⁽¹²⁾、それぞれの具体的なニーズを「持続可能性」や「住人参加」といった国際的に流通する言語に翻訳すべく必死になっている。この翻訳作業に成功するならば、平均月収19ドルのキューバで、その10倍かそれ以上の利益をあげる可能性が開くのだから、彼らが必死になるのも理解できよう。しかしこの翻訳の過程で、彼らをとるまく状況の何がどのように選び取られ、どのような変形と操作をへて国際言語に翻訳されているのかは、プレゼンそのものから読み取ることはできないのである。

プロジェクト表象で何がブラックボックス化されるのかをより明確に知るためには、国際 NGO 職員とキューバのカウンターパートが頻繁に参加する国際シンポジウム、会議、ワークショップの現場に足を踏み入れるのがよい。これら会合は、新しいアイデアや専門用語の収集、主要アクターとのネットワークづくり、そして何よりこれまでのプロジェクトの成功を共有して、持続可能エコロジー農業にかかわるすべてのアクターたちの志気をあげる重要な機会となっている。参加者たちはみな、農業従事者や協同組合代表をふくめて、コンピュータの使用に人類学者とすくなくとも同程度に習熟している。いまやパワー・ポイントの使用はあらゆるプレゼンにおいて必須である。そして、セッション終了のたびに聴衆は講演台に駆け寄り、終えたばかりのプレゼンのパワー・ポイント・ファイルを USB メモリーにコピーしている。それらファイルは、また違った機会に、特定の目的にそって他のファイルと切り貼りされたうえで再使用されるので、すべてのプレゼンがオリジナルを特定できない再現表象 RE-presentation であるといつてよい。では、この自己複製しながら増殖するプロジェクト表象で、何がブラックボックス化されているのだろうか。それは、筆者がここで「中景」と呼ぶ活動領域である。筆者は、2012年に参加した二つの国際シンポジウムの156の発表のうち50以上プロジェクト表象に触れることになったが、そのほとんどが世界規模の事象すなわち「遠景」を提示することにはじまり、そこから一挙に具体的な成功例すなわち「近景」へと移行する点で共通していた。「遠景」とは、たとえばピーク・オイル問題、温暖化問題、資本主義経済の不正、食糧配分の不均衡、森林の消滅や砂漠化、化学農薬の弊害、食料安全保障枠組み、社会主義ブロックの消滅にともなう旧社会主義諸国の困難などであり、「近景」は選ばれた特定の試験農場での具体的取り組みや成果、たとえばバイオ・ガス発生装置の建設、ミミズ養殖場の設置、間作や混合農業の実施、家畜糞堆肥やコンポストの使用、生活排水の活用、そしてもちろん「生産性の向上」「住民参加」「ジェンダー教育」の達成である。「遠景」と「近景」、広大な文脈と特定の具体的文脈での事象とが直結され、そのあいだに横たわる空間はいわば黒塗りされてプロジェクト表象に場所を持たないかのように取り扱われ

るのだった。

私たちはそこから、プロジェクトそれ自体が作られていく過程、たとえばどのように特定の地域と受益者が実験農場として選定され、どのように複数の、ときに対立する受益者たちの要求がプロジェクトへと翻訳されていくかを知ることができないし、他方でプロジェクトの実際の運用状況、たとえば国際 NGO から個別農業従事者にまで至るすべてのアクターが、それぞれ他のアクターたちとどのような戦術で日々折衝を繰り返しているのか、あたらしいネットワークキングのイデオロムがこれまでの官僚機構をどう再組織化しようとしているのか、そして最終的受益者たちの肯定的、否定的フィードバックがどのように処理されているのかなどを、まったく知ることができない。さらに注目せざるをえないのは、各国政府が在キューバ大使館や各国開発援助実施機関を介して無償供与した資金とその流れが、プロジェクト表象から完全に消されてしまっていることである。図像表象として、しばしば各国開発援助実施機関や国際 NGO のロゴが使われることはあるものの、それ以上ではない。ネットワークの形成が図像的にも言葉のうえでも強調されるのも間違いなが、資金を管理する国際 NGO はただ他のアクターの一つとして示され、彼らの実際の役割すなわちプロジェクトの主要な設計者であり組織者であることが、そこに反映されているとは言い難い。「遠景」と「近景」の直結を可能にしているはずの、一プロジェクトにつき何億円、ときには十何億円規模の資金は、表象にまったく痕跡を残さないのである。もちろん、資金提供国や仲介者たる国際 NGO の立場からみればこの消去は問題ないのだろう。提供資金は、いわば国家から現地住人への無償の贈与なのだから。しかし、キューバのアクターたち、とりわけ国際 NGO と接触することが多いキューバ人研究者、技術者、政府職員の視点からは、いかにそれが問題たりえないのだろうか。彼らは極めて熱心に「持続可能性」と「住民参加」を語る。しかし、住民の世界とは無縁の彼方から流れ込む巨額の無償贈与が途絶えれば、プロジェクトはただちに停止を余儀なくされるだろう。実際に彼らが推進しているのが「持続『不』可能農業」であり、クックとコサリがいうように「参加」という名を付された新しい専制への服従であるとの疑念が、なぜ頭を擡げてこないのだろうか [Cooke and Kothari (eds.) 2001]。

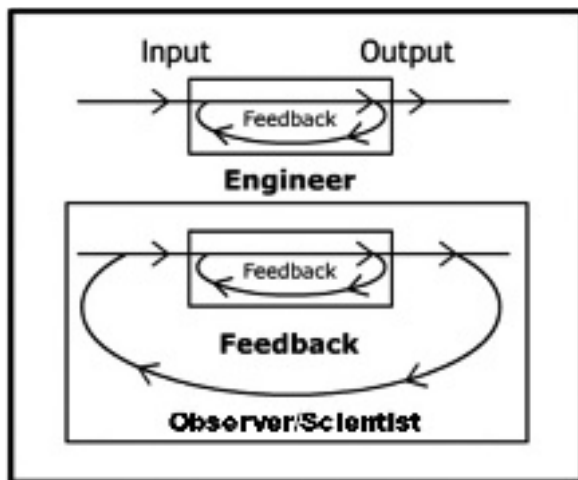
この「中景」のブラックボックス化を批判する誘惑に抗うのはたいへんに難しい。彼らのブラックボックス化は、キューバの持続可能性エコロジー農業が置かれた「ほんとうの文脈」から目を逸らす、脱文脈化の過ちを犯しているのではないだろうか。再帰社会学／人類学や ANT の信奉者たちは、そう攻撃するだろう。あるいは、ネオ植民地主義研究の旗手たちは、こうしたプロジェクトから排除された名もなきサバルタンたちに代わって、彼らの名のもとに批判の声をあげるかもしれない。こうした批判は、すくなくとも知的には容易なことである。しかし、事実上筆者は、多くの他の状況下でもおそらくそうであるように、そうしたサバルタンたちに特権的なアクセスをもちえていない。くわえて、筆者を様々な場面で温かく迎え入れ、プロジェクトにかかわるときに極めて情熱的かつ誠実であるようにみえるキューバ人専門職や農業従事者たちを、ただ上から、あるいは外側から批判することに、筆者はどんな意義も見出せない。ただ批判する代わりに、このブラックボックス化自体から私たちは何かを学ぶことができないだろうか。調査対象を私たち自身の「歪曲された子供っぽい戯画であるかのように描く」[マリノフスキー1980 [1922]: 79] のではない仕方です理解可能にすることこそ、マリノフスキー以来私たちが自らに課してきたことだったはずである。

ある日、筆者がキューバを発つ前日に電話をかけてきたのと同じあのエコロジストに、無償供

与資金の性質について問いを向けたことがあった。彼は、半ば面白がり、半ば激高したかの風情で「それはお前んとこの国の問題だ。おれらの問題ではない」と言い切った。会話を続ける時間的余裕がなかったので、彼が具体的に何を言おうとしたのかは定かではない。また、改めて問うても同じ言葉を返されるだけなのかもしれない。しかしもし彼が「贈与者は、贈与者なりの理由があつて贈与する」ということを言おうとしていたのだとしたら、彼は筆者などよりよほど優れた人類学者であるといえよう。では、彼の側にはどんな理^{ことわり}があるのだろうか。ブルデューやラトゥールに暴露に耽ることを促した理とは違うことだけは、確かである。

IV 二次サイバネティクスにおけるブラックボックス： 「中近景」と対象／文脈の制作

キューバ人専門職たちの理と想像力に接近し、私たちには一見して脱文脈化に見えるものが、彼らにとって不可欠な文脈作成であることを理解するために、ここで簡単に二次サイバネティクス second-order-cybernetics におけるブラックボックスの取り扱いを紹介したい。サイバネティクスは、1940年代にフィードバック機構を備えた通信と制御の理論として始まった。その初期の応用例が第二次大戦期の砲座や通信アンテナの制御であり、今日ではエアコン機器に内蔵されたサーモスタットがなじみ深い例であるため、一般にサイバネティクスというと電気通信や機械工学のイメージが強い。ところがサイバネティクスは、その誕生後急速に、進化生物学、オートポイエーシス論、神経科学、認識科学、量子物理学、複雑系経済学、グレゴリー・ベイトソンらの



一次サイバネティクス (図上) と二次サイバネティクス (図下)。
Wikipedia に掲載の図像を筆者が加工。
http://en.wikipedia.org/wiki/Second-order_cybernetics

人類学、ニクラス・ルーマンらのシステム社会学などへと波及していった。この拡張とともに、とくに1950年代から70年代にかけてサイバネティクスは、一次サイバネティクスと二次サイバネティクスとを区別する方向で展開していく。二次サイバネティクスとは、数理哲学者ハインツ・フォン・フェルスターが「脳は脳理論を記述することを要請されている」と表現するように、システムの観察者をシステムの構成部分とみなすサイバネティクスといえる [Foerster 2003: 289]。これは、第I節の議論との関連でいえば、観察者とその観察対象文脈との不可分の絡まりの問題、ないし観察行為による観察者自身の文脈化の

問題と捉えることもできるし、第II節の議論との関連でいえば、観察／考察／反省の対象に自己自身を組み込んだ再帰性（回帰性）の一形態と考えることもできよう。

ここでは、二次サイバネティクスの詳細に触れる余裕はない。肝心なのは、ラトゥールにも影響をあたえたはずのサイバネティクスが、二次段階でラトゥールとは違うどのようなブラックボックスの取り扱いをしているのかを、押さえることにある。そのために、サイバネティクスの一次から二次への展開を早い時期から準備し、ブラックボックスの問題を主題化した複雑系研究

の先駆者ロシュ・アシュビーの論に依拠したい。彼は、1956年に刊行した『サイバネティクス概論』のなかで、「(観察者の諸発見によって表象されるものとしての) 科学は、〈対象〉システムの『ほんとうの really』ありようを発見することに直接に関わっているのではなく、むしろ観察者の様々な発見に一定の秩序を与える co-ordinate ことに関わっているのである〈 〉内は筆者の捕捉」と指摘する[Ashby 1956: 107]。「システムの『ほんとう』のありよう」と「様々な発見に一定の秩序を与えること」の違いがここでは重要だろう。「システムの『ほんとう』のありよう」は、図の上部にある長方形の箱＝ブラックボックスの内部に隠されている。図の下部の、入れ子状になった内側の長方形も同じくブラックボックスである。上部の技術者たちは、ブラックボックスは自らが作り上げたシステムであるが故に、すでにその中身を知りながらシステムの作動の様子を第三者として観察している。しかし技術者とは違って、図下部で観察者たる科学者たちは、さまざまな実験において、対象物が収められたブラックボックスに入力を与えそれがどのような出力を生むかを観察し、その出力に基づいて、またそれまでとは違った入力を与えるというフィードバックを繰り返している。そして、その結果得られた多様な観察結果の集合に「一定の秩序」を与えることで、つねに部分的であらざるを得ない「科学的認識」を生みだしていく。それではなぜ私たちは、図の下部に示されるような二次サイバネティクスにおいて、観察者＝科学者をさらなる長方形の内に囲い込み、観察者自身を対象に参与する存在と見なさなければならないのだろうか。ここにきて私たちは、慣れ親しんだ工学的イメージから離れる必要がある。入力を与え、出力を観察するだけが科学者の活動ではない。通常の実験、たとえば生物の細胞システムの実験において、ある特定の実践的目的にしたがってブラックボックスを作り上げ、実験の現場に挿入するのが科学者自身である点が肝要である。観察者にとって「意味のある」出力を獲得するために、このブラックボックスをさまざまに作り変えていくのもまた観察者である。それは科学者が、世界という広大な文脈に遍在する生物細胞システムを、その多様性のままに、まるごと取り組みの対象にできるわけではないからである。だからアシュビーは、「この箱の存在を、少なくとも一時的にでも受け容れることによって、そしてそうすることによってのみ、わたしたちは科学的認識を発展させることができる」という[Ashby 1956: 87]。ラトゥールが想定するのは正反対に、アシュビーらにとって取り組みの対象たるブラックボックスは、定義上「白色化 whitening = 開けること」を拒むものである。実験の文脈を取り扱い可能な範囲内に画定し、必要十分に単純化することで、適切かつ取り扱い可能なブラックボックスを作り上げるのが科学者自身である一方、ブラックボックスの内にある対象の「ほんとうの」のありようについて、彼らは決して知ることができない。それを予め知ることができるならば、そもそも実験をする必要はないし、一つや二つの実験、数百や数千あるいは数万の実験で知りつくすことが出来たならば、それは科学知の対象であることを止めるに違いないのである。活動中の科学知の対象は、決して自らの全貌を科学者の前にさらけ出すことはない。

実験のためのこのブラックボックス作りは、キューバの持続可能エコロジー農業の実験で彼らが「中景」を黒いままにし続けることに関して、少なくとも一定程度には、それを「不誠実さ」や「隠蔽体質」に帰すのとは違う理解をもたらしてくれるだろう。彼らにとって入力とは「遠景」に属する地球規模の問題であり、出力とは「近景」において獲得される具体的な成果であり、そしてこの出力がふたたび新たな入力へとフィードバックし、各国政府大使館や開発援助実施機関からの資金流入と、国際 NGO による新たなプロジェクトデザインを呼びよせるのだといえるだ

ろう。ここまではよい。しかし、キューバ人専門職は、他のアクターたちとの日常的な交渉と折衝を繰り返すなかで、エンジニアのように何がブラックボックスの中にあるのかを充分に知るばかりか、むしろその中味を作りだしてさえいるのではないだろうか。しかも彼らは、アシュビーの科学者たちとは違って、ブラックボックスに対する入力とそこからの出力の集合に秩序をあたえて「科学的認識」を手にするのに関心をもっているのでもない。だが、彼らを一次サイバネティクスを観察者であるとみなして、対象にたいして中立的な一次観察者のイメージを自己自身のために反復複製しながら、上から、あるいは遠くから観察するのをやめたらどうだろうか。忘れてならないのは、彼らが熱心に取り組んでいるのが持続可能エコロジー農業の実験であって、交渉や折衝、金勘定ではないことだろう。そして、以下みるように、彼らはこの実験においてまさに二次サイバネティクスとして振る舞うのである。

幸運にも、筆者は彼らの活動を一瞥する機会をえた。もっともそれは、人類学者が「近景」として高く価値づけてきたような光景ではない。というのは、観察対象となった活動が、これまで述べてきたようなプロジェクトから排除されたサバルタンたちのそれではないからである。前節で筆者がした「中景」と「近景」の区別にしがたかったとしても、筆者がこれから紹介する二つの光景をどこに位置付けるか特定するのは難しく、「中景」と「近景」のあいだのどこかに位置づけられるとしか表現しようがない。ここではだから、ひとまず「中近景」と呼んでおきたい。一つめの「中近景」は、2009年にそれぞれ農学と社会学を専門とする二人の科学者が、住民の「積極的な」参加をえて、マタンサス州の二つの町の持続可能性の計測と比較を試みた調査に関するものである。農業省から資金をえて実施された本調査の成果は200頁におよぶ分厚い報告書に結実し、2010年以降、彼らが所属する政府系研究所を国際 NGO が絡む大規模持続可能農業プロジェクトの一大拠点の一つに押し上げている [Machado n.d.]⁽¹³⁾。

持続可能性の計測と比較に際して彼らが採用した方法論は、科学者の一人がコスタリカでの研究交流の機会学んだ、国際自然保護連合開発の MARPS (*Mapeo Analítico, Reflexivo y Participativo de la Sostenibilidad*) と呼ばれるもので、日本語に直訳すれば「分析的、再帰的、参加型、持続可能性地図作成」となる。この方法論に従えば、持続可能性の程度は、「エコシステムの健全性 *el bienestar ecosistema*」と「人間の福祉 *el bienestar humano*」の二つの次元 *dimensiones* を座標軸として析出可能である。二つの次元の点数を得るために、それらは複数の側面 *aspectos* に分解され、それがまた複数の変数 *variables*、さらにそれが「計測可能な」指標 *indicadores* に分解される。実際に計測されるのは最後の指標であり、科学者たちが実施した調査では指標は80ほどに達していた。そこから、変数、側面、次元への積みあげは比較的単純な算術により導き出される。彼らがこの方法論をキューバに適用する際に直面した困難は、まずこの側面、変数、指標を、「キューバの二つの田舎町の諸状況に適合するように」、どのように取舍選択し、修正して用いるかだったという。くわえて、彼らが実際の調査を進める過程で理解することになった最大の困難は、各指標に対応する現況を指標から変数、変数から側面へと合算していくために、統一の基準で点数化（100点満点法）することだった。二つの町のうちの一つでの彼らの試みをみてみよう。たとえば「エコシステムの健全性」の次元のうち、「河川管理地帯」の側面、「破壊状況」の変数のひとつである「河川沿岸沿堤における森林破壊」の指標では、200m 以上の水の流れを河川とみなして町内の約500haの地域を特定し、そのうち404haの森林破壊が進展している現況に20点を与えている（ $100 - (404 / 500 \times 100) \div 20$ ）。また、「使用生産システム」の側面、「輪作

の実施」変数に属する「輪作面積」の指標について、70%の農地における輪作を100点としたうえで3%の現況に4点を与え（ $3/70 \times 100 \div 4$ ）、「自然再生」の側面、「原生雑木林マラブ」の変数に属する「マラブに覆われた地域」の指数では、耕作地でも住宅地でもない4026haのうち2943haがマラブ覆われている現況に、73点の点数を与えている（ $2943/4026 \times 100 \div 73$ ）。簡単な算術にみえる操作にも、困難が垣間見える。何を河川とみなし（200m）、どの程度の輪作を土地の肥沃度を維持するために最適と考えるのか（70%）は、現地の自然環境や生産作物の種類、生産技術や農地の制約の問題を総合的に考慮に入れなければならないし、農業従事者にとっては農耕の障害でしかないマラブの繁茂を、エコシステムの健全性の指標のひとつと捉えること自体、多大な発想の転換を強いられたのである。

この困難は「人間の福祉」の次元の点数化でさらに顕在化する。たしかに「人間の福祉」の次元に属す各指標、たとえば一定人口あたりの電話器の数、幼児死亡率から、各種農産物の生産状況にいたるまで、大多数の指標には関連省庁が定期的に公開する統計的数値が与えられている。しかしそれらはそれぞれ単位を異にする生データにすぎず、それら同一基準で取扱い可能にするため物差し *escalas* が欠けているのだった。そこで MARPS の方法論は、各指標について基準点を想定し、この基準点の導出に住民の積極的参加を求めている。ふたつの田舎町の小学校で、住人たちは指標それぞれの基準点をめぐって永遠と議論し、その基準点との相対的關係から現況を点数化していった。たとえば「人間の福祉」という次元で、「基礎的公共サービス」の側面、「コミュニケーション」の変数のひとつである「電話器設置台数」の指標について、住人達は長い議論の末に人口100人につき20台の電話器を最適状況との結論に達し、100人につき0.48台の現況に100点満点で2.4点の点数を与えている（ $0.48/20 \times 100 = 2.4$ ）。また、同じく「基礎的公共サービス」の側面の「健康」の変数に属する「幼児死亡率」の指標に対して、住人たちは全国平均の6%を最適状況に設定し、25%を最悪状態と見なしたうえで、15.3%の現況から52点の点数を導き出した（ $\{1 - (15 - 6) / (25 - 6)\} \times 100 \div 53$ ）。各々の点数が、基準点の設定次第であることは明白である。いったいどのようにして彼らは、電話器台数の最適状況や幼児死亡率の最悪状況を（同様に、先の河川の定義や輪作の最適割合を）、意見交換と利害の摺合せのなかで導き出すことができるのだろうか。充分な解答とはいえないが、最低限必要な解答として「比較を通じて」と言うことができよう。基準点を導き出すために、住人たちは明示的にせよ暗黙裡にせよ自分たちの状況を近隣の町々の状況や、場合によっては親類や友人の幾人かを介して耳にした首都ハバナ市での状況と比較している。しかしもちろんのこと、彼らはカラカスやマイアミ、東京の状況とは比較していない。観察者たちは、観察対象の状況を特定するために、比較すべき他の対象と選び出したうえで対象を計測する物差しを作り上げ、そのことによって対象そのものの性質（人間の福祉やエコシステムの健全性の度合い）を生み出している。二次サイバネティクソン同様、彼らは観察対象に参与しその一部をなしているのである。

本調査の目的は、ふたつの町の持続可能性を比較することにあつた。ところが上にみたように、持続可能性状況の数値化が最終的に依拠しているところの80の指標のひとつずつが、それ自体住人たちの比較の産物であつた。いや、指標によっては、比較を通じて自分たちが置かれた相対的位置や価値をまず先取りし、そこから逆算して基準点を導き出していた可能性も否定できない。こうした事情は、参加住人たちや彼らを指導した二人の科学者のまったくの不合理、半ば病的な結論先取りの証しといえるだろうか。しかし、ここで思い出さなければならないのは、持続可能

性の程度を計測する普遍的に適用可能な物差しなどどこにも存在していないことである。1987年に国連の環境と開発に関する世界委員会が持続可能性概念を提起して以来、この概念の歴史は、持続可能性を析出するために考慮に入れる指標の数を徐々に増やし、より包括的な文脈でその「ほんとうのありよう」に漸近しようとする歩みだった。まさに ANT の格言がいうように、「事実」を事実として定着させるには、ネットワークは長ければ長いほど良い、というわけである。そして誰かがときおり「いままで誰も考慮に入れていなかった要素に注目すべきだ」と、知の組み換えを促す。私たちが良く知る、あのワン・ナッピズムである。持続可能性指標の問題にとりくむ多くの科学者たちにとって、これまで周縁化されてきた要素を含みこむより包括的な文脈を手にすることが、安直な合意をえることより重要である⁽¹⁴⁾。指標の爆発的増加がもたらす弊害についてはスーパー・コンピュータが乗り越え可能にしてくれるだろう〔比較参照として Edwards 2013〕。しかし、キューバで個別具体的にこだわる彼らは異なっている。彼らにとっては、むしろ指標のひとつずつの捉え難さが格闘の対象だった。そして、二次サイバネティションと同様に、その『『ほんとう』のありよう』はよく分からないものの、ひとまず「持続可能性」と名づけ可能な「何か」を容れるブラックボックスを巧みに作り上げ、取り組みの文脈をたちあげる。「持続可能性」の「ありのままの状態」なるものに直接に触れることができないことなど、再帰性を存分に発揮しながら多大な労力と時間を費やして最適状況に関してようやくの合意を見出した彼らには、自明のことだろう。彼らにとって何より重要なのは、ブラックボックスと具体的に関わり可能とすることで、何であれ触知可能な出力を生みだす入力を誘い込み、「この」町をより良くすることに他ならないのである。それこそが、彼らが作り上げようとする文脈だった。そして事実、この調査の後、彼らの町に大規模プロジェクトが舞い込むことになったのである。

二つめの「中近景」に移ろう。それは、上記の科学者たちが所属するのと同じ研究機関が2012年に主催した国際シンポジウムでのバイオマス部門でのやり取りの場面である。デンマークでエコロジー科学博士号を取得したばかりのある若きキューバ人エコロジストが、家畜堆肥やミミズ養殖土など有機肥料の使用とバイオ・ガスの活用についてのいくつかのプレゼンに、総括的コメントを与えていた。それらは、ソ連崩壊によって化学肥料と燃料の不足に直面したキューバ農業の切り札だともいえる。ところが、彼が登壇中からいら立ちを隠せないでいた聴衆のコロンビア人農学者は、質疑応答の時間に入ると真っ先に発言をもとめ、次のようにエコロジストに異議を唱えた。

君たちの発表の趣旨はよく分かるけれど、とても誤解を招きかねない言い方をしていると思う。持続可能性、持続可能性と頻繁に繰り返しているけれど、私からみれば入力と出力のすべてを考慮に入れているとはまったくいい難いものばかりだ。

若きエコロジストはすぐさま指摘を認め、確かに入力と出力のすべてを計算に入っていないこと、来年度以降は「真に持続可能な農業をめざして」その欠陥を克服しなければならないと応じた。筆者はもちろん、このコロンビア人の挑戦に興奮を禁じえなかった。というのは、彼の発言が前節で述べた「中景」の消去の問題、つまり諸外国からの資金供与に強く依存し続けるプロジェクトの性質を、キューバ人が決してしない仕方で公の場面に引きだしたと考えたからだ。ところが筆者にとって意外なことに、彼が問題にしていたのは、ミミズ養殖場やバイオ・ガス発生装置の

建設費・資材費など、国際 NGO を介して流れ込む入力の問題ではなかった。コロンビア人農学者はキューバ人エコロジストの応答を途中でさえぎり、「問題は君がいうブラックボックスの中身なんだよ」と続ける。うまく理解できなかった筆者が、質疑応答終了後に会場の外で問いを投げかけると、彼がいうブラックボックスの中身とは、土地の肥沃度の推移、生産物の多様性（効果のある間作の実施）、灌漑用水へのアクセス、単位面積あたりの労働者の数、彼らの労働条件などのことだという。周到に外部とのつながりを切断して取り扱い可能なブラックボックスを作り上げたところで、内部にもまた考慮に入れるべき指標が無数に折り畳まれている。しかもそれらの指標のそれぞれを、どのようにして単一の基準に総合すればよいのかという問いが再び立ち上がる。コロンビアでは、労働条件だけでなく肥沃度から水へのアクセスに至るまでのすべてが米ドルに換算されて、持続可能性の状態を算出するのに用いられているという。コロンビアですべての価値が米ドルに換算されるのがどのような理由によるものであるにせよ、キューバでは状況はさらに複雑である。二つの異なる為替レートから食品の値段や労賃に至るまで、貨幣や価値に関するすべてが政府のコントロール下にあるなか、キューバのペソで価値を計算することは極めて非現実的である。すべての価値をジュールやカロリーに変換して集計する手法も知られているが、農業従事者たちにとっては、実際に支払わなければならないコストと、政府が買い付ける農産物の値段こそが重要なのであり、熱量での計算結果は持続可能性をめぐる議論のすべてをまったくの絵空事にかえてしまうだろう。だから、ちょうどあらゆる資金供与が国際基軸通貨（ドルやユーロ）でなされるように、持続可能性エコロジー農業に関わるあらゆる価値は国産基軸通貨にもとづいて算出されなければならない。農業のあらゆる側面を市場論理に回収する資本主義に果敢に抗い、どれだけ彼らが取り扱う対象を限定し、閉じた文脈に据えようとしたところで、その対象は常にすでに外部に浸食され、取り組みの文脈も脱文脈化の危機にさらされている。しかも場合によっては、長年の宿敵の物差しであるばかりか支配の道具が、浸食と脱文脈化の先鋒として到来するのだ。

筆者とコロンビア人農学者の会話に注意深く耳を傾けていたキューバ人エコロジストは、次のように語った。

エコロジーの問題ってというのは、常にマクロのレベルとミクロのレベルがある。僕は政治的的局面に関心をもっているんで、どうしてもマクロなレベルにこだわってしまう。しかし、エコロジーの問題に純粹に科学的に取り組むならば、ミクロなレベルの詳細を追っていかなければならない。マクロに上って行っても、ミクロに下って行っても、現象は無限に複雑なんだ *infinitamente complicado*。

この発言は、エコロジーや持続可能性と名づけられる「何か」の性質をたいへんよく捉えている。後期グレゴリー・ベイトソンが繰り返し考えを巡らせたように、エコロジーないし持続可能性の世界では、人間の精神から地球温暖化に至るまでのあらゆるものが、入れ子状にフィードバック・サイクルで結びついている〔詳しくは、Harries-Jones 2002〕。この分野で真剣に思考しようとするものの誰もが、そのことを良く知っている。エコロジストをふくめキューバの専門職はそのことを承知のうえでお、実際に取り扱い可能なブラックボックスを巧みに作りあげ、具体的な取り組みの文脈を浮かびあげようとする。しかも彼らの場合、人類学者もまた慣習的にしてきた

文脈設定、対象世界をこの分野やあの分野で切りだしたり、視野に収める領域をこの範囲やあの範囲に設定すること以上の課題に直面している [Strathern 2004: xiii-xxxv]。エコロジーないし持続可能性は、経済、文化、農業といった分野わけや、町、地域、国家といった範囲に分割可能ではなく、むしろそれらを跨いだ全体空間にしか存在しない。エコロジーないし持続可能性と呼ばれる何かと具体的に関わろうとする以上、その対象そのものが、無限に開かれた地平をブラックボックスという小さな箱に含みこむことを要請するのである。厳密に閉鎖されたはずの対象と文脈に、すでに基軸通貨とそれが構成する巨大な資本主義体制が侵入してしまっていることが、扱おうとする対象の性質をよくあらわしている。彼らが直面している課題は、この外部の侵入をなんとか制御しつつ、なおかつ有限と無限を直結させるという、みたところ不可能にみえる作業なのである。

V 結論にかえて：「キューバ革命の緑化」とマリノフスキーの子供たち

なぜ持続可能エコロジー農業に従事するキューバ人専門職は「中景」を黒塗りするのだろうか。分析するものの文脈設定によって、答えは幾重にも変化するだろう。それは彼らの不誠実さの表れかもしれないし、事情を良く知らない外国人にプロジェクトが台無しにされることへの恐れ、あるいは単に「中景」の中身に彼らがそれほど関心をもっていないからでもありうる。持続可能エコロジー農業にさしたる興味を示さないキューバの友人たち、筆者が長年つきあってきた宗教者たちも、これくらいの候補を容易くあげることができる。友人たちに敬意をしめすのは吝かではないが、持続可能エコロジー農業に従事する専門職に可能な限り寄り添おうとしてきた筆者が、上記のいずれかひとつを選び出すとすれば、犯人は最後にあげた「無関心」ということになるだろう。すでに指摘したように、彼らは傲慢さわまりない外国人（とうぜん筆者自身を含む）に対処したり、ひっきりなしに不平を口にする非協力的な農業従事者たちを説得することよりも、持続可能エコロジー農業の推進にこそ関心をむけている。けれども、前節で紹介した二つの挿話をみた後、この彼らの無関心と密接に関連するもう一つの解答もまた浮かび上がってくるだろう。「中景」のブラックボックス化は、「中近景」のブラックボックスを巧みに作り上げ、実験を繰り返していくために、不可欠だったはずである。ネットワークの切断なくして、具体的に取り組み可能な対象と取り組みの文脈は決して立ち現れえない。この意味で「中景」のブラックボックスは黒く塗りつぶされ続けることによって、「中近景」のブラックボックスをいわば削り出しているのだといえる。筆者はここまで意図的に、「中景」と「中近景」におなじブラックボックスの語をあててきた。しかしすでに明らかなように、それら二つは明確に性質を異にしている。「中景」が触れられることのない地となることに徹することによって、「中近景」が図として立ち上がるのである。

ラトゥールの呼びかけに従って、「中景」のブラックボックスを抉じ開け、ネットワークをただひたすら追跡していくことは、理論上は可能だろう。だが、いま一度強調しなければならないのは、どこで追跡をやめたらよいのかという問いが、常に残り続けることである。農業従事者の生活のあれこれから、キューバ人専門職と国際 NGO 職員の折衝、各国大使館職員を説得するために国際 NGO 職員がする巧みな翻訳、大使館や開発援助実施機関からの資金の流入や、その資金の原資であるところの各国の税収まで遡ればよいだろうか。あるいは、税の納付を可能にして

いる決してエコロジカルとも持続可能ともいえぬ私たち自身の経済活動にまでだろう。他方、持続可能性やエコロジーという概念や政治目標をめぐるネットワークを辿っていくことも可能である。それは概念史というよりも、現実政治のほうにより深く根ざしているのかもしれない。いや、エコロジーや持続可能性なるものを思考可能にする、様々な装置（MARPS からスーパー・コンピュータまで）の展開の方がむしろ重要だろうか。しかしあなたは、追跡をつづけ広い文脈を手にするたびに、常にさらに広い文脈の存在に気づかされざるをえず、同時にかつて手にしていたかもしれない個別具体の詳細を失っていくに違いないのである。ストラザーンが鋭く指摘するように、私たちが慣習的に繰り返してきた規模の調整 scale adjustment は、決して「これが適切な規模」だとの解答を与えてくれない [Strathern 2004 : xiii-xxv]。私たちは、持続可能性やエコロジーと呼ばれる対象が無限大のなかに霧散していくのを眺め、あるいは追跡の過程のそこかしこで直面する個別具体ひとつずつにひそむ微細な襞のありようを感知し、何もできずただシニカルに弛緩して、その場に立ちつくすのかもしれない。なるほど、革命家とは正反対の人物像といえよう。

本稿では、二つの革命家像をとりあげた。一方は冒頭であげた「文脈化革命」の担い手たちであり、他方はキューバ革命の担い手たちだった。そして、ここにきて、二つの革命家像は互いのメタファーとして姿をたち現すだろう。「彼ら」と「私たち」の距離を設定することによって人類学史に革命を起こしたマリノフスキー同様、キューバ共産党体制の下エリートとして革命を担い続ける専門職たちは、「中景」を黒く塗りつぶすことで自分たちが取り組み可能な文脈をつくりだしていた。この括り出しがどれほど生産性をもつのかを、筆者は予測することができない。しかしすくなくとも、マリノフスキーの革命が長いあいだ人類学に活力をあたえ、それが高い知的生産性を誇ってきたことは事実と思う（これは筆者の信仰告白に違いない）。その知は、他の人文社会科学の諸前提に潜む^{エスノセントリズム}自民族中心主義に繰り返し警鐘を鳴らしてきたし、また今も鳴らしつづけている。キューバの革命家たちの文脈作成の試み、また文脈作成を可能にし、かつそれが可能にする再帰性を、如何なる理由にせよ否定することは、人類学史の多くの部分を否定する父殺しに耽るに等しい。もちろん、マリノフスキーの革命的な呼びかけを金科玉条のごとく守り通す必要はない。事実、彼以後さまざまな文脈化革命が繰り返されてきたし、その担い手たちが高らかに宣言してきた新しい文脈の発見から学ぶことは依然として多い⁽¹⁵⁾。しかし、革命の度に繰り返される「これが『彼ら』や『それら』が置かれたほんとうの文脈である」との主張には、よほど注意深くあったほうが良いだろう。とくに、「キューバの革命の緑化」をなんとか了解可能にすべく翻訳を試みるとき、あの仲が悪いはずの双子、再帰社会学／人類学と ANT が手とりあって抱きしめようとする広大な文脈を「彼らが置かれたほんとうの文脈」と見なすことは、翻訳の助けよりはむしろ妨げになるだろう。新しい学問の潮流が自らの輪郭を形作るときに呼びだす文脈と、その学問が眼差す対象それ自体が立ち上げる文脈とを混同してはならない。「キューバ革命の緑化」のメタファーとしてより適切なものは、それがいかに古びた過去の遺物にみえようとも、やはりマリノフスキーの「文脈化革命」なのである。

それでは、依然としてマリノフスキーの子供たちであり続ける私たちが、個別が促す自己異化の果てに夢想する「人間の研究」、そこにある個別と普遍の接続の問題はどう捉えたらよいだろうか。この点についても、「彼ら」と「私たち」が互いを照らし出していることを確認しておきたい。彼らは、筆者が「中近景」と呼んだ厳密に閉じられた実験空間に、持続可能性やエコロジー

と名づけられる何かを収め、そこにを与え出力を観察することで、決してそれ自体として触れることのできない無際限の広がり、と、関わりを持とうとしていた。その試みは確かに、生物学者や細胞物理学者たちが実験のために括りとった細胞片を観察することで、生物界全体について何ごとかを語ろうとするのに似ている。ここではそのことに加えて、「キューバ革命の緑化」がかの地で置かれている文脈を喚起して、有限と無限、個別具体と普遍を直結する彼らなりの作法の首尾一貫性を浮かびあげておこう。マリノフスキーなら必ずそうするに違いない。この観点から、まずなにより、革命の担い手である彼らが持続可能エコロジー農業の実験に取り組むとき、それがキューバ「の」実験である以上に、キューバ「での」実験であることは強調されてよい。それが何であれ「人間の研究」を志向する人類学者が、キューバ「を」研究するというよりは、キューバ「で」研究するのと似ている。1959年の革命勝利以降、世界各地からキューバに押し寄せてきた「政治巡礼者たち」[Horowitz 1996]が、いま再び持続可能性エコロジー農業ツアーにむけて流れ込んでいることに、今日の革命の担い手たちは極めて意識的である。巡礼者にとってもキューバ人専門職にとっても、キューバはグローバルな課題に果敢に取り組む最良の実験室であり続けてきた。だから持続可能エコロジー農業をめぐる実験は、食料の適正な配分、貧富の格差の最小化、高い水準で維持された教育と医療の無償提供など、さまざまな問題を抱えつつも実施されてきた試みとの延長線上にこそ、捉えられなければならない。これらはいずれも、キューバが抱える問題への解答である以上に、社会的公正の達成というグローバルな課題に対するキューバ「から」の解答であるといえよう。

しかしもちろんこと、ベルリンの壁の崩壊とソビエト連邦と共産圏の解体以降、やがて世界革命が達せられるなどと想像するキューバ人はもうどこにもいない。アルゼンチンからキューバ、キューバからコンゴやボリビアに渡ったかのエルネスト・ゲバラのように、革命運動をひとつの社会またひとつの社会と繋げていくことで世界のすべての住人をひとつの人民へ団結させ、個別や特殊に拘束されないユートピアを達成せんとする未来への信頼は、すでに過去に属している。彼らは個別具体と普遍を地続きで結ぼうとする夢のあと、ベハーや田沼が「ポスト・ユートピア」[Behar 2000; 田沼2008]と呼ぶ世界に生きている。だが、それにもかかわらずいまも革命の担い手たちは、独自の再帰性を鍛え上げながら、世界の実験室を実現せんと奮闘しつづけている。「政治巡礼」者たちの眼差し、世界中の「良識的知識人」たちの羨望と憧れが、彼らの背中を強く後押ししているだけでない。国際NGOがロートのようにして各国政府から集約する無償援助資金が、眼差しや憧れに実質をあたえている。もちろん彼らは、巡礼者たちの懐具合や、彼らが普段どんな生活をしているかをできるだけ詮索しないように努めるし、無償援助資金がどのような来歴をもった富の一部であるかを気にしない。革命を担い続ける彼らを選び取ったのは、世界と水平面上で地続きになるのではなく、むしろ地続きであることを拒否することで世界と結ばれることだった。彼らにとって、グローバルでありつづける最後のチャンスは、逆説的にもキューバを他の世界から括り出すこと、そのことにこそ見いだされるのである。

マリノフスキーの子供たちは、ここでもまたキューバ革命の担い手たちと出会いなおす。私たちは個別社会や個別事象の詳細を調べあげ、そのことによって自己を異化し、その「積み重ね」のはるか彼方に「人間の研究」の達成を想像しようとしてきた。しかし、個別と普遍の接続に思い悩むのは私たちだけではなかった。キューバ革命の担い手たちは地続きの接続を断念したあと、断絶化によって一挙に普遍に跳ねあがろうとする。いや普遍への跳躍が無理だとしても、普遍の

僅かな一片を私たちに垣間見せようとするのだ。そうだとしたら、「積み重ね」という私たち自身の加算法への信頼は疑いを差し挟まれてしかるべきかもしれない[比較参照として Gad 2013]。キューバの彼らが信頼するのはむしろ「黒塗り」という減算法だった。もちろん、どちらが良いのか結論を焦る必要はない。何ごとも、急いてはことを仕損じる。いつになっても出立点にあるのは一に還元できない複数性であり、まずは、文脈設定、再帰性、そして個別具体から普遍への跳躍のさまざまな手法と美学の数々を、できるだけ「彼ら」に寄り添って観察することから始める他ない。しかもその観察が、一次観察ではなく、対象に参与しその一部を構成する二次観察を運命づけられているのだとしたら、行き先を想像するなどまだまだ早すぎるくらいであることが、確かに了解されるだろう。筆者のこれまでの記述と分析、とくにマリノフスキーを手掛かりに対象を浮かびあげる手法は、二次観察の産物以外のなにものでもない。彼らが私たち同様マリノフスキーの子供たちに見えたとすれば、なんとも了解しがたい彼らを容れるブラックボックスを筆者がそのようなものとして作り上げたからである。

あらゆる二次観察は、再帰性の梯子を上りより広い文脈を獲得することで「客観」への到達を夢みる一次観察と、まったく別の方角を向いている。もし私たちが「人間の研究」の切れ端を既に手にしているのだとすれば、人は目的地を知らずとも旅をつづけることができるということ、そのことだけを慎ましやかに教えてくれているのである。

本研究を可能にした調査は、科学研究費補助金事業「『再帰的』思考と実践の多様性に関する人類学的研究」(23251022 研究代表者：大杉高司)の助成をうけて実施した。また本稿は、同事業の一貫として2014年11月15日に一橋大学にて開催した国際シンポジウム Comparative Reflexivities. における筆者の発表原稿 *Infinitely Open but Strictly Closed: A Post-Utopian Reflexivity in Cuban Experiments of Sustainable Agriculture*. に大幅な加筆をほどこしたものである。

注

- (1) マリノフスキーを革命家になぞらえるのは筆者の独創ではない。たとえば [Jarvie 1964] を参照されたい。
- (2) 『マリノフスキー日記』[マリノフスキー1987 [1967]]の刊行によって沸き起こった人類学者の内省的自己批判については、ギアツが手際よくまとめ、独自の立場から分析している [ギアツ (ギアーツ) 1996]。
- (3) 筆者は、「マリノフスキーの子供たち」の表現をクリフォード・ギアツから拝借した [ギアツ (ギアーツ) 1996]。
- (4) 浜本 [1985; 1996] の議論も、ベンヤミンの翻訳論と矛盾しないように読める。個別と普遍の関係に対する筆者自身の見解は保留しておきたい。ただし、本稿最終節を参照のこと。
- (5) ラトゥールは、実体視され様々な事象の説明項とされてきた *society* と、社会／自然の境界を越えて生成される *the social* を区別する [Latour 2005]。また、文脈 *context* の語も、多くの場合前者にひきつけて否定的に用いられる傾向が強い [たとえば、Latour 2005: 215]。したがって、彼がネットワークないし *the social* とよぶ広がり文脈と名づけ ANT を人類学史上に位置付けるのは、ラトゥール派の意に反した筆者の発想によるものであることに留意されたい。
- (6) ラトゥールらの学問潮流に革命性を認めることは、彼ら自身にとっては不本意なことかもしれない。というのは、ラトゥールが「科学革命」なる概念を疑い、トマス・クーンらに代表される科学史を批判するからである [ラトゥール2008 [1991]: 89-158]。しかし同時に、彼の語り口それ自体は、たいへん革命家然とし

たものである。彼は、自然と社会を分け隔てる近代の「憲法」を乗り越えたのちに、自然と社会のあいだの広大な空間に「王国」がたち現れ、そこで真の「民主主義」が達成されると予言している〔ラトゥール2008 [1991] : 88, 239-43〕。革命家が「他なる革命」を否定するのを、私たちは幾度耳にし、目撃してきただろうか。

- (7) 「キューバ革命の緑化」なる語が、いついかにして使われ始めたかを筆者は確認していない。ただし、ピーター・ロセットによる〔Rosset 1995〕が「革命の緑化」の語を書籍の題名に使用している。
- (8) 日本語で読めるキューバの有機農法の事情については、〔吉田 2002a, 2002b, 2004〕を参照のこと。しかし本稿で示すように、筆者には、吉田の記述は状況を美化しすぎているように映る。
- (9) 「ポスト・ユートピア」の概念については、〔Behar 2000 ; 田沼 2008〕を参照されたい。また、関連する論考として〔大杉 2008〕がある。
- (10) *CCS (Cooperativas de Créditos y Servicios* 信用サービス組合) は、組合員のそれぞれが農地を個別所有しつつ信用貸付業務と灌漑その他のサービスを共同で運営する組合で、1959年の革命勝利でもたらされた農地改革以降に組織された。その後1975年の第一回共産党大会をへて、農地所有者がそれぞれの土地を集約して共同所有する *CPA (Cooperativa de Producción Agropecuaria* 農業生産協同組合) が組織された。*UBPC (Unidad Básica de Producción Cooperativa* 共同生産基礎単位) は、公営農場が農場労働者に土地を払い下げ共同運営させるもので、比較的最近の1993年以降に組織された。Burchardt [2011] によれば、全農地に占める割合は、UBPC42%、CPA10%、CCS11%、公営27%、国軍4%、人民権力会議2%、個人農業従事者4%である。それぞれの農業協同組合の歴史と現状、とくに持続可能農業の実際については、〔Funes, García, Bourque, Pérez and Rosset (eds.) : 2002 ; Chan and Roach 2013〕に詳しい。
- (11) 透明性は、住民参加とあわせて、国際 NGO や世界銀行が推進する開発プロジェクトの二大鍵概念である。透明性については〔Hetherington 2011〕を、住民参加については〔Cooke and Kothari (eds.) 2001〕を参照のこと。
- (12) 都市部の住人を農業へ向かわせる背景および現状については、〔Adriana 2003, 2009〕を参照のこと。
- (13) 以下の記述は、最終報告書〔Machado n.d.〕について2013年3月に二人の科学者に実施したインタビューにもとづく。
- (14) 持続可能性指標の多様性と様々な分野からの問題提起、協働の難しさについては、たとえば〔矢口 2010〕を参照のこと。
- (15) たとえば、筆者自身 ANT の「近代」論に導かれながら、科学的唯物論と呪物崇拜を統合しようとする20世紀中葉のキューバ人思想家について論じたことがある〔大杉 2010〕。

参考文献

凡例：原著出版年については、必要がある場合にのみ〔 〕で示した。

Adriana Premat

2003 Small-Scale Urban Agriculture in Havana and the Reproduction of the 'New Man' in Contemporary Cuba. *European Review of Latin American and Caribbean Studies*. 75 (October) : 85-99.

2009 State Power, Private Plots and the Greening of Havana's Urban Agriculture Movement. *City and Society* 21 (1) : 28-75.

Asad, Talal (ed.)

1973 *Anthropology and Colonial Encounter*. Ithaca Press.

アサド、タラル

2004 [1993] 『宗教の系譜 キリスト教とイスラムにおける権力の根拠と訓練』 中村圭志訳、岩波書店。

Ashby, William Ross

1956 *An Introduction to Cybernetics*. Chapman & Hall LTD and University Paperbacks.

Ashmore, Malcolm

1989 *The Reflexive Thesis: Wrighting Sociology of Scientific Knowledge*. The University of Chicago Press.

バランディエ、ジョルジュ

1982 『舞台の上の権力——政治のドラマトゥルギー』 渡辺公三訳、平凡社。

Behar, Ruth

2000 Post-Utopia: The Erotics of Power and Cuba's Revolutionary Children. In *Cuba, the Elusive Nation: Interpretations of National Identity*. Damian Fenandez and Madeline Betancourt (eds.), pp. 134-154. University Press of Florida.

ベンヤミン、ヴァルター

1996 「翻訳者の使命」 『ベンヤミン・コレクション2』 浅井健二郎編訳、pp.387-411、ちくま学芸文庫。

Bourdieu, Pierre and Loic J. D. Wacquant

1992 *An Introduction to Reflexive Sociology*. University of Chicago Press.

ブルデュー、ピエール

2009 [1997] 『パスカルの省察』 加藤晴久、藤原書店。

Chakrabarty, Dipesh

1998 Reconstructing Liberalism?: Notes toward a Convention between Area Studies and Diasporic Studies. *Public Culture* 10 (2) : 457-481

Chan, May Ling and Eduardo Francisco Freyre Roach

2013 *Unfinished Puzzle: Cuban Agriculture: The Challenges, Lessons & Opportunities*. Food First Books.

チョウ、レイ

1998 『サバルタンの知識人』 本橋哲也訳、青土社。

クリフォード、ジェイムズ

2003 『文化の窮状 二十世紀の民族誌、文学、芸術』 太田好信、慶田勝彦、清水展、浜本満、古谷嘉章訳、人文書院。

クリフォード、ジェイムズ、ジョージ・マーカス 編

1996 [1986] 『文化を書く』 春日直樹、足羽与志子、橋本和也、多和田裕司、西川麦子、和邇悦子訳、紀伊国屋書店。

Cooke, Bill and Uma Kothari (eds)

2001 *Participation: The New Tyranny?* Zed Books.

Descola, Philipe and Gisli Palsson

1996 *Nature and Society: Anthropological Perspectives*. Routledge.

Dilley, Roy

1999 *The Problem of Context*. Berghahn Books.

Edwards, Paul

2013 *A Vast Machine: Computer Models, Climate Data, and the Politics of Global Warming*. MIT Press.

Ferguson, James

1990 *The Anti-politics Machine: Development, Depoliticization, and Bureaucratic Power in Lesotho*.
University of Minnesota Press.

Foerster, Heinz von

2003 *Understanding Understanding: Essays on Cybernetics and Cognition*, Springer-Verlag.

Frazer, Sir James George

1936 [1890] *The Golden Bough: A Study in Magic and Religion*. Palgrave Macmillan.

2003 [1919] *Folklore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law Part I*.
Keesinger Publishing.

Funes, Fernando, Garcia Luis, Martin Bourque, Nilda Pérez and Peter Rosset (eds.)

2002 *Sustainable Agriculture and Resistance: Transforming Food Production in Cuba*. Food First Books.

Gad, Christopher

2013 Postplural Attitude. *NatureCulture*. 02 : 55-79

Gell, Alfred

1998 *Art and Agency: An Anthropological Theory*. Oxford University Press.

1992 *The Anthropology of Time: Cultural Constructions of Temporal Maps and Images*. Bloomsbury Academic

Geertz, Clifford

1984 Anti Anti-Relativism. *American Anthropologist*. 86 : 263-278.

ギアツ（ギアーツ）、クリフォード

1987『文化の解釈学 II』吉田禎吾、柳川啓一、中牧弘允、板橋作美訳、岩波現代選書。

1990『ヌガラ 19世紀バリの劇場国家』小泉潤二訳、みすず書房。

1996「目撃者としてのわたし マリノフスキーの子どもたち」『文化の読み方／書き方』森泉弘次訳、pp.
103-144、岩波書店。

ギデンズ、アンソニー

1993『近代とはいかなる時代か？ モダニティの帰結』松尾精文、小幡正敏訳、而立書房。

Graber, David

2001 *Toward an Anthropological Theory of Value*. Palgrave Macmillan.

Gregory, Chris

1982 *Gifts and Commodities*. Academic Press.

浜本満

1985「文化相対主義の代価」『思想』625 : 105-121

1996「差異のとらえ方 相対主義と普遍主義」『思想家される周辺世界』青木保ほか編、pp. 69-96、岩波書店。

Harries-Johns, Peter

2002 *Ecological Understanding and Gregory Bateson*. University of Toronto Press.

Henare, Amiria, Martin Holbraad and Sari Wastell (eds.)

2006 *Thinking Through Things: Theorising Artefacts Ethnographically*. Routledge.

Hetherington, Gregg

2011 *Guerrilla Auditors. The Politics of Transparency in Neoliberal Paraguay*. Duke University Press.

Holbraad, Martin and Morten Pedersen

- 2009 Planet M: The Intense Abstraction of Marilyn Strathern. *Anthropological Theory* 9 (4) : 371-394.
- Horowitz, Irving Louis
- 1996 Political Pilgrimage to Cuba, 1959-1996. *Institute for Cuban & Cuban-American Studies Occasional Papers*, Paper I.
- Jacoby, Russel
- 1995 Marginal Returns: The Trouble with Post-Colonial Theory, *Lingua Franca* Sep./Oct. : 30-37
- Jarvie, Ian
- 1967 *The Revolution in Anthropology*. Routledge and Kegan Paul.
- 春日直樹 編
- 2011 『現実批判の人類学 新世代のエスノグラフィへ』 世界思想社。
- Kohn, Eduardo
- 2013 *How Forests Think: Toward an Anthropology Beyond the Human*. University of California Press.
- 栗本英世、井野瀬久美子
- 1999 『植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ』、人文書院。
- Langham, Ian
- 1981 *The Building of British Social Anthropology: W. H. R. Rivers and his Cambridge Disciplines in the Development of Kinship Studies, 1989-1931*. D Reidel.
- Latour, Bruno
- 1988 The Politics of Explanation: An Alternative. In *Knowledge and Reflexivity*. Steve Woolgar (ed.) Sage Publications.
- 2005 *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-theory*. Oxford University Press.
- ラトゥール、ブルーノ
- 1999 [1987] 『科学が作られるとき 人類学的考察』 川崎勝、高田紀代志訳、産業図書。
- 2007 [1999] 『科学論の实在 パンドラの希望』 川崎勝、平川秀幸訳、産業図書。
- 2008 [1993] 『虚構の「近代」 科学人類学は警告する』 川村久美子訳、新評社。
- Leenhart, Maurice
- 1979 [1947] *Do Kamo: Person and Myth in the Melanesian World*. University of Chicago Press.
- ルクレール、ジェラルド
- 1976 [1972] 『人類学と植民地主義』 宮治一雄、宮治美江子、平凡社。
- レヴィ＝ストロース、クロード
- 1970 『今日のトーテミズム』 仲沢紀雄訳、みすず書房。
- 1972 『構造人類学』 荒川幾男、生松敬三、川田順造、佐々木明、田島節夫訳、みすず書房。
- Machado, Hilda
- n.d. *Informe Final Marti-Perico*, not published.
- Mahmood, Saba
- 2011 *Politics of Piety: The Islamic Revival and the Feminist Subject*. Princeton University Press.
- マリノフスキー、ブラニスワフ
- 1980 [1922] 「西太平洋の遠洋航海者」 『マリノフスキー、レヴィ＝ストロース』 泉靖一訳、中央公論社。
- 1987 [1967] 『マリノフスキー日記』 谷口佳子訳、平凡社。

マーカス、ジョージ、マイケル・フィッシャー

1989 [1986]『文化批判としての人類学 人間科学における実験的試み』永渕康之訳、紀伊国屋書店。

Maurer, Bill

2005 *Mutual Life, Limited: Islamic Banking, Alternative Currencies, Lateral Reason*. Princeton University Press.

ミード、マーガレット

1976『サモアの思春期』畑中幸子、山本真鳥訳、蒼樹書房。

Mosse, David

2004 Is Good Policy is Unimplementable? Reflections on the Ethnography of Aid Policy and Practice, *Development and Change*. 35 (4) : 639-671.

Munn, Nancy D.

1992 The Cultural Anthropology of Time: A Critical Essay. *Annual Review of Anthropology*, 21 : 93-123.

大杉高司

1999『無為のクレオール』、岩波書店。

2001「非同一性による共同性へ／において」『人類学的実践の再構築 ポストコロニアル転回以後』杉島敬志編、pp. 271-296、世界思想社。

2008「〈アイロニー〉の翻訳」『ポスト・ユートピアの人類学』石塚道子、田沼幸子、富山一郎（編）、pp. 309-340、人文書院。

2010「キューバ革命の『近代』 『恥ずかしがらない』唯物論からの眺め」『国立民族学博物館研究報告』35 (2) : 299-335。

太田好信

1998『トランスポジションの思想 文化人類学の再創造』、世界思想社。

Parry, Benita

1992 Resistance Theory / Theorizing Resistance or Two Cheers for Nativism. In *Colonial Discourse / Post Colonial Theory*. Peter Hulme, Margaret Iversen and Francis Baker (eds.) , pp. 172-196. Manchester University Press.

ポランニ、カール

1980a『人間の経済1』玉野井芳太郎、栗本慎一郎訳、岩波書店。

1980b『人間の経済2』玉野井芳太郎、中野忠訳、岩波書店。

Price, Sally

1989 *Primitive Art in Civilized Places*. University of Chicago Press.

Rabinow, Paul, George Marcus, James Faubion and Tobias Rees

2008 *Designs for an Anthropology of the Contemporary*. Duke University Press.

Riles, Annalise

2001 *The Network Inside Out*. University of Michigan Press.

ロサルド、レナート

1998 [1993]『文化と真実 社会分析の再構築』椎名美智訳、日本エディタースクール出版部。

Rosset, Peter

1995 *The Greening of the Revolution: Cuba's Experiments with Organic Agriculture*. Ocean Press

Scharfstein, Ben-Ami

1989 *The Dilemma of Context*. New York University Press.

Schneider, David M.

1980 [1968]. *American kinship: a cultural account*. The University of Chicago Press.

Stocking, G. W. (ed.)

1983 *Observers Observed*. The University of Wisconsin Press.

1991 *Colonial Situations*. The University of Wisconsin Press.

Strathern, Marilyn

1987 Out of Context: The Persuasive Fictions of Anthropology. *Current Anthropology*. 28 (3) : 251-281.

1990 *The Gender of the Gift: Problems with Women and Problems with Society in Melanesia*. University of California Press.

2004 *Partial Connections*. Updated Version. Altamira Press.

杉島敬志 編

2001 『人類学的実践の再構築 ポストコロニアル転回以後』、世界思想社。

タンバイア、スタンレー

1996 [1990] 『呪術・科学・宗教 人類学における「普遍」と「相対」』 多和田裕司訳、思文閣出版。

田沼幸子

2008 「はじまり」『ポスト・ユートピアの人類学』 石塚道子、田沼幸子、富山一郎（編）、pp. 7-25、人文書院。

Taussig, Michael

1987 *Shamanism, Colonialism and the Wild Man: A Study in Terror and Healing*. The University of Chicago Press.

Thomas, Nicolas

1991 *Entangled Objects: Exchange, Material Culture, and Colonialism in the Pacific*. Harvard University Press.

Woolgar, Steve

1988 *Knowledge and Reflexivity: New Frontiers in the Sociology of Knowledge*. Sage Publications.

矢口克也

2010 『「持続可能な発展」 理念の論点と持続可能性指標』 国立国会図書館調査及び立法考査局。

山路勝彦、田中雅一

2002 『植民地主義と人類学』、関西学院大学出版会。

山下晋司、山本真鳥 編

1997 『植民地主義と文化』、新曜社。

吉田太郎

2002a 『200万都市で有機野菜で時給できるわけ 都市農業大国キューバ・リポート』 築地書館。

2002b 『有機農業が国をかえた 小さなキューバの大きな実験』 コモンズ。

2004 『1000万人が反グローバリズムで自給・自立できるわけ スローライフ大国キューバ・リポート』 築地書館。

(一橋大学大学院社会学研究科教授)